

## 卒塔婆双葉町

熱海幸代

登場人物

ワキ

希正院の僧侶

ワキツレ

法安院の僧侶

シテ

原ハツ

ワキとワキツレ、登場。

ワキ

悪くないな。いい眺めだ。さあ、もう行こう。

ワキツレ

だめだよ。

ワキ

なぜさ？

ワキツレ

アカルイミライを待つんだ。

ワキ

ああそうか。(間) 確かにここなんだろうな？

ワキツレ

待ち合わせさ。

ワキ

波打ち際だつて言っていたからな。(二人とも海を見る) で、いつまで待つんだ？

ワキツレ

お釈迦様はどうに亡くなり、弥勒菩薩の出現もその五十六億七千万年後と  
いうことで、まだまだ先の話。

ワキ・ワキツレ

神も死んだ、この空っぽの時代に生きていて、それはどこか夢のエネルギー  
ーのよう。人知を超えろというか。運よく人間に生まれてアカルイミライ  
に出会う幸運に恵まれたわけで、悟りを得る手がかりとしたい

ワキ・ワキツレ

超臨界に学んだ身としては  
超臨界に学んだ身としては

元気でいるかと身を案じる親なんてもういないようなもの

親がいないのだから、わたしのことを気に留める子孫だっていない

世の中のやつはみんなばかさ

そういうのがこの自分の ほんとうの生き方

ワキ

もう行こう。

ワキツレ

だめだよ。

ワキ

なぜさ？

ワキツレ

アカルイミライを待つんだ。

ワキ

ああそうか。

間

ワキツレ

しっ！（二人は耳をすます。ワキは重心を失って倒れかける。ツレの腕につかまるので、ワキもよろめく。二人は、つかまり合って、目を見合わせたまま、耳をすましつづける）

シテ、登場。右手で杖をつき、傘をさしている。

シテ

あたしも堕ちたもので、昔最高に思い上がった頃は、この瞳には青白い光が眩く輝き、並み居る男どもを次々と虜にしてきたものだった。水揚げに選ばれたのは、芥子信之介。あたしの背中に爪を立てながら、「搔く、平気？」と呟いていた。それから芥子の知り合い、正直爺さんが身受けした後は、あたしの魔性をひたすら隠して、全国津々浦々までお座敷を用意しては舞を披露させたものよ。お花代は大変なものだった。それが今じゃそのへんの卑しい女たちまでに汚物扱いされて、人前でお漏らしの恥をさらして、みじめな日々がこの身にデブリと積み重なって、そのあげくの果てに四十歳にして老いさらばえた女になりました。

シテ

都会では、あの女もしかしてアカルイミライ……というように

在家の人びとはワツと毎月のように布施を行ってきた

まさに伝力の虜よ みんなして功德を積んだ

出家の人びとには あたしの瞳の光で輪廻の流れを断ち切ります

細胞分裂によって再生することを止める力で

食を断ち皮膚を剥がし 外界に抗うことのない無垢の身になります

八識はそのままに解脱するのです

みんな成仏した

でも、いまだでは、こんなみじめなわたしのこと わざわざ咎め立てしないでしょ

大波といっしょに あたしも出ていく

体がもうしんどくて堪えられませんので、この朽ち木に腰掛けて休もうと思います。

シテ

シテ、舞台中央に行き、床几に腰掛ける。

ワキ

アカルイミライかと思っただけだ。あれ、そのホームレスが腰掛けているのはどう見ても卒塔婆ですね。これは厳重注意してあそこをどかせないとですね。

ワキツレ

賛成です。

ワキとワキツレ、舞台下手に立つ。

ワキ

おい、その婆さん

シテ

なにか？

ワキ

あのね、あなたが腰掛けてるのは卒塔婆、畏れ多くも仏の姿を表現したものだ。あなたが腰掛けていると、アカルイミライも近づいてこない。そこをどいて別のところで休みなさい。

シテ

そうはおっしゃいますが、字だってどこにも書いていない。仏の姿が刻まれているわけでもない。どう見たってただの朽ち木だよ。

ワキ

ここにはかつて七千人もの人びとが心豊かに暮らしを営んでいました。ところがある大波のときに、恐ろしい呪いがこの地をとらえ、人びとは着の身着のまま立ち去るしかなかったのです。飼っていた何百頭の牛馬は呪いがかかっているのです、そのまま残すしかありませんでした。この卒塔婆は、そうした生きとし生けるものの無念をかたちに残したものです。朽ち木にみえても、その徴がないなんてはずはないんです。

シテ

あたしなんて いまじやお漏らしデブリの惨めな存在だけれど、それだけに無念の気持ちは分かるんだよ。そんな徴があっても、あたしが分からないとでも言うわけ？

ちよつと説明してみてよ。どこが無念なの？ そもそも呪いつて何よ？

ワキツレ

それはだね、五十年前に遡る話なのだよ。

シテ

だからそれがいったい何よ。

ワキ

そのころの村人たちは、出稼ぎするほど生活に困っていたのだが、そこにアカルイミライがお越しになられる、ということでもみなで迎え入れた。もちろんちつとは不安に思うものもいたが、みんなのため、ということで納得したものだ。

ワキツレ

漁がしにくくなるので漁民たちは心配したが、代わりに黄金を賜って事を収めた。アカルイミライのための在所の普請やお世話ということで働き口も増えて、みなも正しい決め事によって福の神が来たとずっと喜んでいた。福の神なのに、呪いと言うのはおかしい。あたしを馬鹿にしないで。

シテ

ワキ

それがだね、この間の大波ですべてが偽りだと分かったのだ。アカルイミライだと思ってお世話してきたのに、実はデブリの偽者にすり替わっていた。ちよつと水やエレキテルが足りないから、といって何十年、何百年経つても消えないような恐ろしい呪いを辺り一面にかけたのだ。それも呪文やお札なんてキレイなやり方ではなくて、お漏らしてあのでっかい固形物を手の届かない奥にぼつとんと落とす、というお下劣なやり方だった。

シテ

花の色は 移りにけりな いたずらに。

ワキツレ

シテ

何かおっしゃいましたか？  
いいや、何が無念というのが分からない。人びとはいいいい思いをしておったのだろう。

ワキ

アカルイミライだと思つて招き入れ、大波が来る前に成仏した人びとはそうかもしれない。でも、その次の代には故郷を離れるという辛い思いをさせたことに、あのときの信じたことが過ちであつた、取り返しがつかないという無念があるのだ。

シテ

アカルイミライを信じて成仏した人びとは、生きる苦しみから逃れることができたのだな？

ワキシテ

いかにも。  
アカルイミライを信じたおかげで、生きる価値が高くなった。

シテ

大波の後の呪いを知らないのであれば、そうだ。

ワキ

こうした人びとは生活が豊かになったから、安心して子どもを残せたのだな？

ワキ

そうとも言える。

シテ

であれば、アカルイミライを信じて招き入れていなければ、こうした子どもたちの多くはこの世には存在していなかった。  
いかにも。

ワキツレ

シテ

この世に存在していなければ、生きる喜びも何もない。零だ。  
無から有は生まれぬ。

ワキ

シテ

こうした子どもたちは、元の居場所は失われたが、生きることには価値があると思うから生きている。したがって、子どもたちが得ている価値は、零より大きいのは明らかではないか。

ワキツレ

たしかに生きておる。(小声で) だが行き着いた先で、呪いがかかっているといじめられる子どももいるそうだが。

シテ

アカルイミライを信じた人びと、その子どもたち、いずれも生きることの価値は元々の状態よりも高まっているではないのか。いくら呪いがあるにしても、こうした人びとはみな生きる喜びを増している。

ワキ

(ひそひそ声で) なるほど、この説法はいろいろ使えそうだ。風紀が乱れ

地謡

るといって、いまあちこちのお座敷がいったん閉じられているけれど、この論法でまたごまかすことができる。

実体なるものは存在しない。

ある人が、アカルイミライがそこに来ると信じている。この人がそこで暮らすことになって周りの人たちは呪われていると言う。

でもこの人は後の経験によって自分の信念を変えるだろうか。

実際には、この人は

「ここは呪われている」という信念と

「ここはアカルイミライが来る」という信念を

両立させているのではないか。

僧侶はこの心底熱心な信念のパズルを聞くと、

この乞食 真の悟りに到達されているお方だと言って

額を地面につけ 三回礼をした。

ワキ、両手についてシテに礼をする。

シテ

それで気をよくしたあたしが 冗談まじりに詠んだ歌は

超臨界だったらこんなことをしちやいけないのかもしれない

でも心の底が抜けて自分というものがすっかり溶けてなくなったんだし

どうでもいいじゃん

地謡

ねえ 胡散臭い堅物坊主

ねえ 胡散臭い堅物坊主

シテとワキ、立つ。

ワキ

ところであなたは一体何者なのか。どうかお名前を教えてください。

シテ

お恥ずかしいですけども、名乗ることにしますと、

ここにいるのは芥子信之介から正直爺さんに身受けされ、曾根中将をタニマチとして東市正の官職を与えられた原小力の娘、原ハツのなれの果ての姿です。

ワキ・ワキシテ

なんてことだ……。原ハツといえばそのむかし人気沸騰の芸妓。燃えたぎる心を胸の奥に潜めて、ぞっとするほど冷たい表情で男をあしらひ、まとう厚手の唐織の装束は御殿のそこかしこにあふれかえっていたというのに。

シテ

みずからお熱を上げちゃって、羽根扇を回して、

地謡

熱爛を手にいい男にお熱を上げて、酔いを勧める。そのときの流れるような仕草といったら。管を巻くフリも得意の手口。原村の人びとは、たちまちに虜になって、分別も理性も失って何でも「ほうじゃのう」「ほうじゃのう」と言いなりだった。

それが大波を体に浴びてからは、何日も高熱でうなされて死線をさまよった。発作的に装束を破り捨て、おむつを当てもお漏らしは止まらず。それから五年、デブリっぱなし。まわりに伝染病の病原菌をまき散らし、呪いがかけられている。誰ももう近寄ることもできない。

四十にして惑わずどころか まさかこんなみじめな思いをすることになるなんて

告解の自己帳にわたしの醜態が晒されている

シテ、傘で顔を隠す

地謡

首にかけた袋の中に入っているものは何？

シテ

使用済みのおむつ 燃えるゴミに出せないからいつまでも持っているんだよ

地謡

病原菌をまき散らすかも

シテ

背負っている袋の中には？

地謡

垢まみれの汚れた風呂水

シテ

破れた唐織りの装束

破れた傘

シテ、傘を見つめるしぐさ。

地謡

この傘では御身を助けてもらえないはずはない

シテ

鉄砲ドンで埒が明かない

地謡

もともと呪いのかからないように と

大波に備える進言があっても すかさず袖にした

シテ、傘の内部を覗き込むしぐさ。

地謡

狂乱の心を取り憑いて

すると声に変調をきたし 異様な姿に変わっていく

シテ、杖を捨てて、ワキに詰め寄っていく。

シテ

ねえあなたをちようだい  
ねえそこのお坊さん。

ワキ

眩しい。目の前が真っ暗だ。

ワキツレ

お、落ち着いて、頭を冷やされよ。お水を差し上げよう…あれ、おかしい、  
竹筒は空だ。怒りのはけ口は開いておらんのか。

シテ

今日もハツのところに行こうよ。

ワキ

あれ？ あなたがハツじゃないんですか？ 何をわけのわからないこと  
を。

シテ

ハツはね、あれは悪魔だ。あっちからもこっちからも、

五月雨のようにお座敷の声がかかる。すっかりお客の離れた座敷でも、原  
ハツを呼べば、取り巻きがお金を落としてくれてぼろ儲けできる。でも楽  
して贅沢しているうちにまたひもじくなる。それでまたハツを呼ぶうちに、  
取り巻きたちが花代をふっかけて座敷ごと乗っ取るのさ。呼んだ連中は骨  
抜きにされて、抗うこともできない。日中アヘン戦争と手口は同じ。いつ  
たんハツに入れ込むと際限なくなつて、みんな身上を潰す。その報いを今、  
四十歳になつてうけていて、…ねえ、誰かそばにいて。ねえ、誰かわたし  
のそばにいて かつてのようにわたしのほとをそなたのほこを上げ下げ  
して矯めてちようだい。

ワキ

今「そばにいて」と言つたあなたに取り憑いているのはいったい誰なんで  
す？

シテ

身上を潰した己の業に悔悟する者ども、ハツの呪いを後世に残すことを一  
生恥じる者だち、ハツの呪いによつてふるさとを追われた人びと、ハツが  
お座敷に上がるのを抗いながら果たせなかつた人びと…。ハツへの積もり  
積もつた恨みが めぐりめぐつてやつてきた。

地謡

やめようと思つてもやめられない執着、ハツのもとに出かけよう  
正直爺さんが 枯れ木にも花が咲くと 死の灰をばらまいている

民の心が惑うこの闇夜に 袖の下を使い この道を通う

どんな邪魔が入つても やめられないこの執着

さあお誘いして稼働させよう

シテ、通気帽子と保冷直着を身につける

地謡

一重・二重・三重・四重・五重 鉛色の袴 裾をたくし上げ

房事の出来事は決して漏らさぬと

シテ、扇を回して頭を指し示すしぐさ。

#### 地謡

いかづちの力に 糺すつかさも 虜にされて理を破り

人目を忍んで 闇夜に出かけては 人の道を外す

人びとが生業を失おうと 集って抗おうと

楮 三桎 ほぐして梳いて 印を刻して 時雨のように舞い落ちれば

深い雪の地も

シテ、舞台の柱を見上げるしぐさ。

#### 地謡

七千の苦しみが押し寄せる。

ねえ、人間の手で止められないもので電気を起こしていたんだね。とつぜん避難しろと言われ、バスで五、六ヶ所回りましたよ。人数制限で断られて……どこに連れて行かれるのか、と。

シテ、右に三回り、左に三回りする。

#### 地謡

こんなことになるとは思ってもみなかった。でもまだ涙も出なくて。実感がわかない。何かやろうとしてもやる気が起きない。夜眠れないので、昼間に寝てしまう。脳神経外科に通っている。眠れなくて。あたまがギューンとする。お人の言葉とかが気になってほとんど寝なかった。煙草を吸ってぼーっと考えていた。人間は寝なくてもいられるのかと不思議に思ったが、急におかしくなって、血圧がすごいことに、二百四十。ストレスが原因だった。じいちゃんが糖尿病とうつ病で大変。見守っていないとダメという感じ。こういう生活になって、お母さんも腰が痛くて足も悪くしていてみんな調子が悪い人ばかり。

シテ、座り、俯く。

#### 地謡

家族がバラバラ、父親や母親が福島で働いているので、子どもたちとの離れ離れを解消しなければいけなかった。放射能から逃げるストレスと、子どもたちが離れ離れになっているストレスを天秤にかけて。帰る場所はないと言われ、いまの場所では呪いのために、いじめや差別を受ける。



地謡

シテ、正面を向く。

もし戻れたら、やっぱりふるさとはいいね、帰ってきたね、としばらくは思うが、その後、好きだった畑の作物もできない。田んぼも作れない。孫たちは会いに来ない。五く七百万円とも言われるお金を使つて、十年後に無くなる町を作ることが生きたお金の使い道だろうか。無関心だったことが孫たちから故郷を奪うことにつながったのは間違いないことで、そこに對する責任は感じている。私はとにかく、孫たちに故郷を作つてあげたい。戻ってくる場所を作りたい。移ったら、おれたちは日本中から忘れられていくんだろう。

シテ、両手を見つめるしぐさ。

シテ

ああ苦しい　めまいがする

シテ、舞台奥のほうに下がる。

地謡

胸の苦しみをどうすることもできず  
破れた服をまとい、髪は乱れ、視力を失い、自力で立ち上がれない  
狂気のように叫び　床を転げまわり　目を剥き　大小便を垂れ流しながら　呪いながら　干からびていく  
でも一中劫のちも　呪いの一割五分は消えない

シテ、扇を胸にあてる。

地謡

夜明けを待たずに死んだ

シテ、座り、俯く。

地謡

もろびとの苦しみが取り憑いて  
こうしてあたしを狂わせている

シテ、狂乱状態を脱する。

地謡

ここからもわかるだろう  
後世を思い祈ることこそ

人の正しい道なのだ

悟りの道に入っている

悟りの道に入っている

シテ、正面を向いて合掌。

ワキ

いやはや。もう行こう。

ワキツレ

だめだよ。

ワキ

なぜさ？

ワキツレ

アカルイミライを待つんだ。

ワキ

ああそうか。

終演。

引用

岡田利規訳「卒塔婆小町」河出書房新社

ベケット著 安堂信也・高橋康也訳「ゴドーを待ちながら」白水社

ソール・A.クリプキ「信念のパズル」 「言語哲学重要論文集」春秋社所収

デレク・パーフィット「理由と人格―非人格性の倫理へ」勁草書房

双葉町住民の声は、東京 FM「LOVE&PEACE ヒューマン・ケア・プロジェクト」

2012.3.21.-23 4.13.㍻